

投資してもいい金額と目標利回りはどう決める？

●適切な投資金額の重要性

金融資産の運用を考える場合、まず最初に、預貯金等の安全資産と、株式等のリスク資産への配分を決めるのが1つのセオリーです。ここでのポイントは、過大な投資金額にならないようにすることです。

運用がうまくいって困る人はいませんが、逆は困ります。考えるべきことは相場が本格的に下落した場合、それに耐えられる投資金額になっているかです。1000万円の金融資産があるとして、200万円を投資に回すのか、500万円を投資に回すのかを考えるほうが、最終的な金融商品選びよりも大事な問題だといえます。

●簡易な決め方

株式の場合、市場全体で見て、短期的に20~30%程度下落する場面はよくあることです。そこで、投資金額の簡易な決め方として、1年後に20~30%値下がりしていた場合に、その損失に耐えられる金額はいくらかを考える方法があります。

たとえば、100万円投資したとして、1年後の時価が70~80万円となり、20~30万円の評価損を被っていたなら、その損失に耐えられるかということです。評価損といえども、その後のライフプランに大きな影響を与えないか、投資したことを後悔しないか、大きなストレスを感じないか、ということを考えます。

200万円投資したら、300万円投資したら、と考えていくと、どこかで損失に耐えられない金額が出てくるはずです。その金額が、現状で投資に回せる上限となります。

別の簡易な方法としては、まず、日常生活資金等のために必要な金額、今後5~10年以内くらいにほぼ確実に支出が見込まれる金額、病気等に備える予備資金を見積もります。これらは支出が必要ときに値下がりしていると困るので、どんなに金

利が低くても安全確実な預貯金等で運用します。これ以外の金額が、投資に回せる上限となります。

●キャッシュフロー分析による決め方

今後のキャッシュフロー表を作成して、投資金額と目標利回りを設定するという方法もあります。

キャッシュフロー表とは、今後の毎年の収入と支出を予想して表形式にまとめたものです。収入から支出を引けば年間収支が求められ、収支がプラスであれば、その分だけ貯蓄が増え、マイナスであれば貯蓄を取り崩すこととなります。年末時点における貯蓄残高(金融資産残高)は前年末の残高を一定の利回りで運用し、それにその年の年間収支をプラスあるいはマイナスすることで求められます。

下図は、今年(2020年)12月で65歳の誕生日を迎え、年末をもって完全に仕事をリタイアし、来年以降は年金生活に入るケースの、金融資産残高の推移を示したものです。

2020年末で4000万円の金融資産を保有していますが、年金だけでは希望する生活資金をまかなえず、さらに自宅のリフォームや車の買い替え、子どもの結婚資金の援助、旅行資金などで金融資産は減り続けます。特に、今後10年間の年間収支の赤字額は累計で約2000万円にもなるので、運用利回り0%の場合は、10年

間で金融資産は半減し、90歳代後半で貯蓄は枯渇することになります。

1%で運用できれば、100歳まで長生きしたとしても貯蓄はプラスを維持していますが、この図では、病気や介護にかかる費用などは考慮に入れていません。支出を見直さない場合は、もう少し高めの利回りを目標にする必要があります。

●実現可能な利回りか

この例の場合、今後10年間の年間収支の赤字に対応する2000万円は安全に運用すべきでしょう。さらに予備資金を500万円とすると、投資に回せる金額は1500万円になります。現状で預貯金等の金利はほぼ0%ですから、仮に4000万円を年2%の利回りで運用しようとした場合、投資に回す1500万円部分で実現を目指す必要があります。

単純に計算すると、最初の年に4000万円を2%で運用できた場合の収益は80万円(=4000万円×2%)になります。1500万円で80万円の収益を得るためには5.3%(=80万円÷1500万円)の利回りが必要です。運用益に対する20%課税を考慮すると、税引前で6.7%の利回りが目標となります。これでは目標利回りがやや高いので、4000万円全体の運用利回りを1.5%にすると、1500万円部分の目標利回りは4%(税引前5%)になります。これだと無理な運用をしなくても、十分、実現可能な利回りになります。

(クルー 目黒政明)

【運用利回りの違いによる金融資産残高の推移の例】

